

聴覚障害生徒による漢字の読み誤り

田中 優子

聴覚障害児にとって、音韻変化のある語の正しい音と表記の獲得は簡単ではなく、健聴児が自然に覚える語も意図的な学習によって覚えていかなければならない。その積み重ねがあつて高等部の生徒は獲得語彙数も増えていると考えられるが、連濁その他の音韻変化のある語の漢字を読むテストの形式で調査をした結果、日常的に使う機会が少なく、馴染みがない語は読み誤りも多いことがわかった。また、平易な語であっても、一定数の生徒は誤った読み方をしたまま、修正されずにきていることもわかった。

キー・ワード：聴覚障害 連濁 連声 母音交替 半濁音

1 問題の所在と研究の目的

日本語には様々な音韻変化現象がある。それらは常に規則的に起こるものではなく、健聴者は幼少期から自然に聞き覚えて習得していく。しかし、聴覚に障害がある場合は、聴覚を活用して聞き覚えることには困難があるため、曖昧なままに誤って覚え、そのまま修正されずにいるケースも見られる。特に書き言葉では、学齢が上がるほど漢字を使用するため、高等部の生徒の場合は語彙として正しく使えているように見えるが、その漢字の読み方を確認して、初めてその生徒が誤った音でその語を覚えていることに気付くことも多い。それゆえ、漢字のテストなどでも、漢字を書く問題よりも読み方を書く問題の方に間違いが目立つ。

本研究では、筆者が勤務する聴覚特別支援学校高等部の生徒達がどの程度漢字の読み方に困難を抱えているか、その実態を把握し、国語の授業における指導に活かすとともに、生徒に結果をフィードバックすることで、自分達の間違いやすい点を認識させることを目的とする。

2 先行研究と本研究の意義

語の音を正しく認識しているかどうかは語の仮名表記によって確認できる。聴覚障害と語の表記の誤りの関係については、児童を対象にした先行研究がある。我妻(1991)では難聴学級児童1～6年生52名

対象に30単語の表記テストを実施し、誤りをいくつかの傾向に分類して分析した。その結果、誤りは「同口形異音が最も多く、次に多いのが濁点。同口形異音の中でも濁点のつけ間違いが多く見られた。」と報告した。濱田(2010)は小学3～5年の聴覚障害児童64名を調査し、聴力レベルと助数詞の読みの連濁のルールの獲得との関係を調べた。茂木他(2012)は聴覚障害児童179名が書いた作文212編を対象に表記の誤りとその発達的な変化について検討し、「どの学年においても濁点の誤りが多かった。」と述べ、濁点以外の特殊音節の表記の誤りは学年を追って減少していくことを報告した。笹目他(2021)は健聴児41名、聴覚障害児6名に対して複合語の合成課題と分解課題を実施し、健聴児は複合語の合成・分解課題の正答状況に一定の傾向が見られたのに対して、聴覚障害児は各課題や条件の正答率に個人差が見られたことを報告した。

このように、聴覚障害児童を対象にした先行研究が多い。いずれも初等教育以降での教育の手立てを考えるために必要な研究である。濱田(2010)では「聴覚障害児教育の中では、本来自然に獲得されるはずの自然言語を意図的な学習の中で教えていくことが求められている。」とある。聴覚特別支援学校高等部の生徒達には小中高の教育の中で語彙の正しい読み方、発音が指導された成果が見られることが望ましい。しかし、それでも獲得しにくい語や、獲得状況

10 聴覚障害生徒による漢字の読み誤り

の個人差もあることが予想される。本研究では高等部の生徒達の状況を調査によって明らかにしたい。

3 調査

(1) 方法

2022 年 7 月に本校高等部普通科の生徒 1～3 年生 55 人を対象に国語の授業で漢字の読みと言葉のテストを行った。本研究では漢字の読みについてのみ扱う。解答はテスト語すぐに生徒に配布し、正答率や誤答の傾向についてまとめたものを後日生徒に配布し、意見や感想を聞いた。

読みを書かせた漢字の問題は全部で 76 問で、種類によって次のように分類される。

a. 連濁が見られる語

「人々（ヒトビト）」、「旅人（タビビト）」のように複合語の後の構成要素の最初の子音が濁音になる語。

b. 母音交替が見られる語

「雨（アメ）」＋「音（オト）」が「アマオト」になるように、複合語の前の要素の母音が変化する語。

c. 連声が見られる語

漢語の熟語およびそれに準ずるもので、/m//n//t/などの韻尾の次にきたアヤワ行の音がマナタ行音に変化してできた語。

d. 半濁音化が見られる語

「立法（リッポウ）」「寒波（カンパ）」のように入声音、鼻音の後でハ行音が p 音になった語。

e. 難しい読み方や特殊な読み方の語

f. 上記 a～e と同じ漢字を含む語

f は例えば a に分類される「口下手」に対して「下手」があったり、同じく a の「驚鼻」に対して「目鼻」があったりする。また、e は調査の意図を生徒に意識させないために加えた問題である。よって、分析対象は a から d とし、f の結果は適宜参照する。

(2) 結果

上記 a から d に分類される語を正答率が高い順に表にまとめたものを示す。Table 1 から 4 の数値の

単位は%で各語の正答率を表す。各語は語のみを示して漢字の読み方を尋ねたが、「大手」のみは「大手（を振って歩く）」と、文の形にした。

Table 1 連濁する語の正答率

青空	100	革靴	85	幼子	44
満足	100	人数	85	痛手	42
歯車	98	人通り	75	夜霧	38
古着	98	肝心	73	総菜	38
和菓子	96	干し柿	73	大手*	22
長靴	91	驚鼻	67	偽金	20
小部屋	87	口下手	60	勘当	18
海亀	85	男気	53	功德	9

太字で示した語は、誤答の傾向から、読み間違いの要因として連濁以外の要因が大きいと考えられるものである。誤答例を多い順に 3 つまで挙げる。()内は回答数である。以下、Table 2 から 4 も同様に誤答例を示す。Table 1 の誤答例については、連濁すべき箇所 で連濁していない語は下線を引いた。また、Table 1 の太字の語は同様に太字で示した。

歯車：はしや(1)

古着：こぎ(1)

和菓子：わかし(1)、わたがし(1)

長靴：ながくつ(5)

小部屋：こへや(6)、しょうへや(1)

海亀：うみかめ(3)、かいかめ(2)、うみのかめ(1)

革靴：かわくつ(5)、かくくつ(2)、かわぐち(1)

人数：にんすう(6)、じんすう(2)

人通り：ひととおり(12)、ひととうり(1)、ひとどうり(1)

肝心：かんしん(15)

干し柿：ほしかき(14)、ぼしかき(1)

驚鼻：わしはな(4)、とんび(2)、たかび(1)

口下手：くちへた(20)、くちへだ(1)、ぐちへた(1)

男気：おとこげ(11)、おとこけ(5)、おとこき(4)

幼子：ようし(13)、ようご(6)、ようじ(6)

痛手：つうて(14)、いたて(11)、つうで(3)

夜霧：やきり(10)、やぎり(5)、よきり(4)

総菜：そうさい(22)、そうな(4)、ぞうさい(2)

大手：おおて(42)、たいて(1)

偽金：にせきん(19)、ぎきん(13)、にせかね(4)

勘当：かんとう(45)

功德：こうとく(48), こうどく(2)

Table 2 母音交替が見られる語の正答率

雨戸	96
雨傘	84
雨音	82
白波	56
金物	55

誤答例

雨戸：あまね(1), あみど(1)

雨傘：あめがさ(4), あまかさ(3), あめかさ(2)

雨音：あめおと(6), あまお(1), うおん(1)

白波：しろなみ(8), しらは(7), はくなみ(4)

金物：かねもの(9), きんぶつ(6), かなぶつ(2)

Table 3 連声が見られる語の正答率

観音	55
----	----

誤答例

観音：かんおん(18), かんね(3), かのう(2)

Table 4 半濁音化が見られる語の正答率

立法	98	難破	78
突風	98	頓服	60
寒波	93	献本	47
一報	84	品評会	16

誤答例

立法：りっほう(1)

突風：とっふう(1)

寒波：かんは(1), かんわ(1), かななみ(1)

一報：いちほう(3), いっし(3), いっほう(2)

難破：なんぱ(7), なんは(4), なにわ(1)

頓服：とんふく(7), じゅんふく(3), じゅんぶく(2)

献本：けんほん(15), こんほん(7), こんぽん(2)

品評会：ひんひょうかい(42), しなひょうかい(1), ひひょうかい(1)

4 考察

(1) 連濁

正答率が70%以上の語と未満の語で比較すると、日常的に使用頻度が高いと考えられる語の方が正答率が高い、つまり、連濁して読むことが生徒に定着しているのではないかと推測される。しかし、正答率が高い語でも、連濁しないで読む生徒が一定数いる。正答率80%以上の語では、連濁をしないで読んだケースは「和菓子」「長靴」「小部屋」「海亀」「革靴」「人数」で延べ26あった。80%以上の生徒は正しく連濁して読めている語でも、高等部の段階で日常的にそれらの語の音を正しく認識できていない生徒が一定数いるということである。特定の生徒がいつも連濁せずに読んでいる可能性もあるので、確認したところ、26例のうち、同じ生徒が2つ重複して間違った読み方をしている例が10例あった。例えば、「人数」を「にんすう」と読み、「小部屋」を「こへや」と読む生徒Aや「長靴」を「ながくつ」と読み、「革靴」を「かわくつ」と読む生徒Bがいるが、生徒AもBも他の全ての語を読み間違えているわけではなく、読める語もあれば読めない語もある。全体としては、同じ生徒が複数の語を連濁で読めずに読み間違える傾向はあるが、そこに法則性は認められない。

「人数」「肝心」「勘当」は漢語の連濁が見られる例で、鼻音の後に起こり、連声濁と呼ばれることがある。条件としては同じものだが、3語の正答率は85%、73%、18%と異なり、特に「勘当」は大きく異なる。ここでも日常的によく使うものほど正答率が高いことが推測される。また、この3語は清音で読んでも濁音で読んでも口形が変わらないので、読み間違いに気付きにくく、「人数」のようによく使う平易な語でも、読み間違いが修正されないまま来てしまった生徒が一定数いるのではないかと考えられる。平易な語だからこそ、高等部でテストに出ることもなく、周囲も生徒が読み間違いをしている可能性をあまり考えず、注意して聞くこともない。そうすると、発音が不明瞭な生徒の場合は読み誤りに気付きにくいため、指摘されることがなかったと考え

12 聴覚障害生徒による漢字の読み誤り

られる。

なお、Table 1 で太字にした語は、連濁以外にも読み間違える要因が考えられる。今回テストした語は全て常用漢字表にあるものだが、「鷺鼻」は「鷺」が人名漢字であり、読めなかった生徒が何人かいた。

「わし鼻」と表記すれば、正答率が上がった可能性がある。また、「男気」「幼子」「痛手」「夜霧」「偽金」

「功德」などは誤答の種類が多く、無回答も見られたので、語彙として知らない生徒も多かったのではないかと考えられる。連濁するかどうかを調査するためには、もっと平易な語を用いるべきだった。今回の調査の反省点である。なお、「鷺鼻」との対比で「目鼻」も問題に入れたが、正答率は40%で、誤答で最も多かったのは「めばな」22%だった。「鷺鼻」は上記のように読めなかった生徒もいたが、それでも67%の生徒は「わしばな」と読めている。そこからの類推で「目鼻」を「めばな」と読んでいるとしたら、連濁する語だけではなく、連濁する語の読みにつけられて起こる読み誤りにも注意が必要である。

(2) 母音交替

Table 2 の「白波」は母音が/o/→/a/に変化し、それ以外/e/→/a/の変化である。どちらも、口形は異なる。

「雨戸」「雨傘」「雨音」と「白波」「金物」では正答率に大きな差が見られる。前者は全て「雨」を使った語であり、3語とも「あめ」→「あま」と音が変わることは共通している。前者も後者も使われている漢字自体は「傘」が中学校で習う漢字である以外は全て小学校で習う漢字である。しかし、後者の「白波」や「金物」は日常的に使う場面は少ないと考えられる。話し言葉として使う場合は「白波」ではなく「波」と言う方が自然である。また、「金物」は「きんぶつ」「かねぶつ」などと読む生徒もいることから、語彙自体を知らない生徒も多いと推測される。

また、前者に関しても、「雨戸」と「雨傘」「雨音」で正答率に差が見られる。日常的にそれらの語を使

う場面を思い浮かべてみると、「雨戸」は家にあれば「日が暮れたら雨戸を閉めて」など、生活の中でもよく使うことが推測できるが、「雨傘」は語彙としては知っていても、話し言葉として使うことはあまりないのではないか。「傘をさす」とは言っても、「雨傘をさす」とは言わない。わざわざ「雨」を付けて話し言葉として使う場面は意外に少ないと考えられる。「雨音」も同様に、話し言葉としてはあまり使わない語ではないか。そして、「雨傘」も「雨音」も平易な漢字を使った語であるため、高校生向けの読み物で書き言葉として使われている場合に振り仮名が振られていることはまずない。よって、母音交替の5つの語の正答率の違いは日常的な使用頻度と関係があると推測される。

読み誤りが特定の生徒によって繰り返し起こっている可能性も確認した。「雨戸」を「あめと」と読む生徒はおらず、「雨傘」を「あめがさ」あるいは「あめかさ」と読んだ生徒のうち、「雨音」を「あめおと」と読んだのは2名で、あとは「雨音」は「あまおと」と読んでいる。つまり、この3語すべてに共通の読み誤りは認められない。また、「白波」を「しろなみ」と読んだ生徒で「金物」を「かねもの」と読んだ生徒はいない。「かねもの」と読んだ生徒のうち2名は「雨戸」を「あめと」と読み、別の2名が「雨傘」をそれぞれ「あめかさ」「あめがさ」と読んだ。このように、間違いの多い生徒はいるが、同じ生徒が一貫して母音交替の読み間違いをしているわけではなく、読み間違いに法則性は認められない。

(3) 連声

今回は連声が起こる語は「観音」1語のみを扱った。「観音」の正答率は55%で18人が連声せずに「かんおん」と読んだが、一方で「感音性」は95%が正しく「かんおんせい」と読んだ。今回の被調査者となった生徒達は全員が感音性難聴であり、自分達の障害に関わる語彙には馴染みがあるため、「感音性」はほとんどの生徒が正しく読める。対して、「観音」はどういうものかは知っていても、日常的に頻繁に使う語ではなく、自分達がよりよく使う「かんおん」

という音から類推して「かんおん」と読んでいる可能性もある。また、「かんのん」と「かんおん」は長音点は異なっても口形が同じであるため、文字に書かない限りは会話でその語を使っている、自分の間違いに気が付かない可能性もある。「かんおん」と書いた生徒の1人は、家の近くに観音寺（かんおんじ）という寺があったので、「観音」は「かんおん」と読むのだとずっと思っていたと言っていた。観世音菩薩の略称である「観音」を日常で話題にすることがないと、連声の読み方を確認する機会はなく、高等部に至るまで読み誤りが修正されずにきてしまった。そういう生徒は他にもいると推測される。今回は連声の例はこの1語だけだったが、次は「反応」や「天皇」のように日常的な使用頻度が高そうな語と、「親王」や「因縁」「安穩」など。使用頻度が低そうな語についても調査をして正答率を比較したい。

(4) 半濁音化

半濁音はバ行で、両唇音なので、半濁音化することで口形は唇を合わせるか合わせないかという大きな違いが生まれる。そのため、その語彙を初めて正しく示されたときに、間違えて覚えてそのまま修正されずにいるということは考えにくい。

Table 4の「立法」「突風」「一報」は半濁音化だけでなく、促音化もする語である。「一報」は「いちほう」と読む生徒もいて、他の2語に比べて少し正答率が下がった。次回調査では条件が同じで「一報」よりも日常的によく使うと考えられる「一方」とも比較してみたい。

「難破」は「なんぱ」と読ませたかったが、この語は地名で「なにわ」「なんば」という読み方もできることから、語単位でのテストは適切でなかった。

「頓服」「献本」「品評会」は正答率が低い。「頓服」の「頓」は中学校で習う漢字で、「服」は小学校3年生で習う漢字であり、高校生が読めない漢字ではないが、「頓服」を読み間違えた22人のうち、「頓」を「とん」と読めたのは8人のみで、後は「じゅん」「と」「さつ」「も」など、様々で、そもそも読み方がわからず、その後の意味もイメージできなかった

生徒が多かったと考えられる。その上で、この語は薬を普段あまり飲まない生徒は日常的に接する機会が少ない語であり、使用頻度も高くはないと推測される。「献本」は更に日常生活では使う機会が少ないと考えられるが、それだけでなく、「こんほん」「こんぼん」と読んだ生徒も多いことから、語彙として知らない生徒もいた可能性がある。「品評会」も語彙として知らなかった生徒がいる可能性もあるが、誤答はほとんどが「ひんひょうかい」である。発音のしにくさから、聞こえる人間は「ひんひょうかい」とは読みづらいのではないかと推測される。もしそうだとしたら、健聴生徒を対象に調査を行えば、「品評会」が馴染みがない語であっても「ひんぴょうかい」と読む生徒が多くなると予想される。発音のしやすさということでは、「礼服」を「れいぷく」と読んだ生徒が5人いた。「礼服」は後部要素が半濁音化する条件に合っておらず、「れいぷく」は発音しやすいとは言えないが、「〇服」を「〇ぷく」と覚えてしまった生徒が誤って類推する場合は、発音のしやすさは考慮されない可能性が高い。また、我妻(1991)で「聴覚障害児においては音声の聴取に障害があるため、音声と文字とは完全には対応していない。」とあるように、「れいぷく」は音として意識すればかなり違和感があるが、音のイメージがなければ文字の違いにも注意がいかないことが考えられる。

(5) その他

本稿「3. 調査 (1) 方法」で分類したfに当たる語で、次の2語に注目したい。

不足：正答率 75%

誤答例

ぶそく(12), ふぞく(1), そぞく(1)

心地：正答率 75%

誤答例

ごち(8), こころち(3), ごち(1)

「不足」は語頭は濁らないが、濁って読んでいる生徒が一定数いる。「材料不足」のように、他の語と結びついて後部要素になった場合には濁るため、その感覚で覚えてしまっているのではないかと推測さ

14 聴覚障害生徒による漢字の読み誤り

れる。しかし、「心地」にも同じことが起こるなら「ごち」という誤りが多くなりそうだが、「ごち」という読み誤りが8人で最も多い。「夢見心地」など、他の語と結びついた場合も誤って覚えてしまっている可能性がある。改めて他の語と結びついた場合と並べて読ませて確認する必要がある。

5 生徒へのフィードバック

生徒たちには、テストの結果を集計してから、テスト返却時に、正解と共に全ての語を正答率が高い順に並べた表に、多かった間違いも多い順に3つ書きだしたものを配布した。そして、自分に多い誤りの傾向について考えたことを書いて提出してもらった。まとめると、次のような意見があった。

- a. 濁点や半濁点の間違いが多い。
- b. 聞いてわかって、いざ書くとなるとわからなくなってしまう。
- c. スマホやパソコンのキーボードで入力すると、濁点はたまに間違っても勝手に変換してくれるから、間違いに気づけない。
- d. 話すときは濁点をつけていなくても指摘されないし、聞いていても気づけない。
- e. 二語が合わさったときに濁ることは知っていたので、「目鼻」は濁ると思っていた。
- f. 「海原」など、音読みでも良さそうな気がする。
- g. 音訓どちらかで間違えることも多い。
- h. 間違えて覚えていたものも結構ある。
- i. あまり使わない言葉は読み方もわからない。

生徒の内省でも、濁音と半濁音の読み謝りが多いということが確認できた。また、今後読み誤りを減らしていく上で上記b, c, dについての自覚を持つことは大切なことである。特にcは問題で、確かに「あおそら」と入力しても、「あおぞら」と入力しても「青空」と変換される。機器の使用が当たり前になり、手書きで文章を書くことが以前より少なくなっている現在、語の読み方や表記を調べる際に、パソコンやスマホの文字変換に頼る生徒は少なくないと考えられるが、その変換が100%正しいわけではなく、確認が必要だという認識を生徒に持たせることがで

きたのは、フィードバックの効果があったと評価できる。なお、数人の生徒から、健聴の生徒は同じ調査をしたのか、という質問があった。自分たちとの違いを知りたかったらしい。健聴生徒のデータがあったら、読み誤りを減らすことへの生徒のモチベーションをさらに上げることができるのではないかと考えられる。

6 まとめと展望

今回の調査結果から、聴覚障害生徒の読み誤りは日常的に使用する機会が少ない語に多いが、日常的に馴染みがある平易な語でも一定数の生徒が誤って覚えたまま修正されずにいることがわかった。また、連濁しない語を濁って読んだり、半濁音化しない語を半濁音で読んだりするような読み誤りも見られた。先行研究では児童においては濁点の読み誤りが最も多いことが指摘され、また、茂木他(2012)では、濁点以外の特殊音節の表記誤りは学年が上がるほど少なくなるとしているが、今回の調査では母音交替や連声、半濁音化する語でも読み誤りは見られた。学年が上がるほど誤りはある程度減るかもしれないが、完全とは言えず、また、語の馴染み度によっては読み誤りは全体に多くなる。

本校高等部普通科は生徒の大学への進学率も高く、幼少期には多く見られた読み誤りも、濱田(2010)の言うところの「意図的な学習」の中でかなり修正されていると考えていたが、一定数の生徒に平易な語、日常的に使用される語の読み誤りが見られたことは重く受け止めるべきである。教員も「読めるはず」と過信せずに、特に本稿で扱ったように特殊な読み方をする語については平易な語であっても確認、修正を怠らないことが肝要である。

また、今回の結果や反省点を受けて、更に調査して生徒の実態把握に努めたい。更に、健聴生徒とも比較して読み誤りの要因を分析したいと考えている。

〔付記〕

本研究は筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理

審査委員会の承認を受けて実施されたものである。

〔参考文献〕

阿久津 智(1993)

濁音の問題, 筑波大学留学生センター日本語教育
論集 8. 49-62

馬淵 和夫(1994)

国語音韻論 笠間書院

水谷 修(1990)

日本語教育事典 大修館書店

中道 尚子(1999)

日本語の名詞における母音交替. 東北大学言語学
論集 8. 53-65

舘野 由香里(2012)

現代日本漢語におけるハ行子音の半濁音化につ
いて. 文学部紀要 26 (1). 23-51

〔引用文献〕

我妻 敏博(1991)

聴覚障害児における単語の表記上の誤りに関す
る研究. 上越教育大学研究紀要 10(2). 155-164

濱田 豊彦(2010)

聴覚障害児の助数詞の獲得と聴力との関係に関
する一考察. 東京学芸大学紀要 総合教育科学
系 I 61. 403-407

茂木 成友, 澤 隆史, 四日市 章(2012)

重度聴覚障害児童における表記上の誤りの発達
的变化. 特殊教育学研究 50 (2). 161-169

笹目 友香, 城間 将江, 小渕 千絵, 野口 佳裕
(2021)

学齢健聴児と超額障害児における名詞複合語の
連濁化の検討. Audiology Japan 64. 315-321